

「全てを失っても、香りが残れば君が分かる」 ジョバンニ・クルソー

今回は 18 世紀のフランスの詩人クルソーから始めましょう。重苦しく厳しい抑圧の中世を抜け、解放と欲望の 18 世紀は活動的で生き生きとした詩が残されています。何も持てず、感じることも失う事であっても香りがあれば生を実感できる。それで十分だと、クルソーは考えたのかもしれませんが。んー、やっぱりそんなわけありません。クルソーなんて存在しなけりゃ 18 世紀もそんな時代でもあるわっきゃない。スタートからデタラメ垂れ流しての嘘っぱちのやけっぱちでゴールに向かいたいと思います。

今回は香りをテーマにしてみます。おんちゃんの香りと言えば加齢臭が思い起こされますが、なるべく臭くならないよう、できれば匂いぐらいで止められるよう心掛けて参りましょう。感覚の一つである嗅覚は加齢と共にその敏感さを失っていきます。子供の頃は部屋に入るだけで、誰がそこにいたか分かるほど敏感ですが、大人になればなるほど鈍くなり香りを付け足してしまうこともありますね。私も昔、海外に出かけたときに空港の香水売り場の前を通ったとき、鼻が曲がる経験をしました。西洋の香水文化は全く理解できませんでしたが歳をとれば香りをつける事、嗅覚が鈍ることは理解できるようになりました。今でも香水は苦手ではありますが。

同じ香水やシャンプー、ボディソープを使い続ける事で個人が特定しやすくなることもあります。毎回会えば同じ香りがするので、残り香で「あの人来てたのかな」とバレちゃったりします。バレても良いのですが悪くはないのですが足取りを追われたくない人はこまめに香りも替えた方が良さそうです。色々問題が起きる前に複数のシャンプーを使い分けましょう。ただし、いくら香りを後付けしたところで個人のもつ香りは消すことは難しいでしょう。例えばお風呂に入ることが難しい場合、手術入院、被災後避難所生活、単純に風呂嫌い、このような場合は素の本人の香りが出てきます。本当の意味で個人の特定ができてしまう香りを漂わせるので、嘘のない生のままの本人といった評価が与えられる事でしょう。その本人の飲み食いした物やどれだけ汗をかいたか、さらには多く過ごした場所はどんな場所か、一緒に生活している人はどんな人なのかまで、洗いざらいバレちゃいます。バレちゃいますが本人のむき出しの人生を表現しているともいえます。香りを後付けした人と人生むき出し香り人と果たしてどちらが評価できるものか。ええ、どうでもいい事でしょう。どんな香りも好き嫌いがあるものですから自分が好きな香りを漂わせておけばよいのでしょう。きっと好きな香り同士が集まってくるはずです。

私の祖母は線香の香りを漂わせる人でした。仏壇に行けば「あ、ばあちゃんの匂いだ」と思ったものです。お墓参りに行ってもばあちゃんの香りがしてましたし、葬式でもそうです。私は、ばあちゃんの事は好きではなかったのですが、ついでに線香の香りも好きではなくなりました。となると葬式もお墓参りも仏壇も好きではなくなってしまう。不思議なもので香りの連鎖反応でもいう事が起きてしまいました。意外と香りの強度というものは記憶の中で影響力が大きく広いものなのかも知れませんね。ちなみに、なぜばあちゃんの事が好きではなかったかと言うと、

死臭を凄く感じるからです。香りの話しなので死臭という言葉を使いますが、意味は「どうせ死ぬから何もする事はない」といった人生観です。私にはこの人生観は受け入れられないです。半分死んでる人のようでどうしても恐ろしくて拒否してしまいます。私は「どうせ死ぬからおもしろいことやろう」と考える方なので真逆に捉えているのでしょう。

辛気臭いという奴でしょうか。ちょっと重くなりそうだったので、話を変えます。

私は先日、壊れた炊飯器を新調しました。一体何年ぶりに買ったか分からなかったくらい昔の炊飯器を使っていたのですが新しい炊飯器で炊くご飯のおいしさといったらありません。飯炊き技術もまだまだ進歩するのかと驚きました。晩御飯は半合程度しか食べられなかった私ですが新炊飯器では1合やつつけられます。体重を落としやすい私には大助かりな新炊飯器。次は新しい米の銘柄を試したくてしようがありません。もっと早くに買い換えるべきでした。なんという時間の無駄でしょうか。いやはやもったいない。テレビ通販みたいな話の流れですが、大丈夫です香りの話しに違いありません。この炊飯器で1番おいしく炊けるコースは50分かかります。20分過ぎたあたりから部屋中に炊き立てご飯の香りが充満し始めます。すでに何度も食べているので脳がヨダレを垂らしはじめるのです。他のことをやっても鼻は塞ぐことができません。グツグツシューシューやり始めると、気分は更に上がります。飯が炊けるだけで嬉しくなるのは昭和の残党としての性と言ってしまう。はい、食べ物の香りは生き物としてどれほど強く感じる事なのか。おそらく、くたばるまで食べ物の香りをを感じることは手放したくはない、誘惑に負けっぱなしで構わない、そう思われます。

ハッと気付きました。書きながらお腹が減り始めました、危険です。食事の事を書くと脳がやられる。香りの話しなのに晩御飯のエビフライを妄想しはじめてしまう。タルタルソースがいいかな、いや、酸味でいくならウスターソースも捨てがたい。天つゆを試すのも悪くないな、意外とワサビと合うんじゃないのか？食味のリセットで味噌汁は薄めにしてご飯、あーご飯モリモリであー、これあー、やばいー。

失礼。改めていきましょう。香りです香りね。人の残り香と食べ物の香りは書いたので次は場所の香りについて書いてみます。よくある表現で、真夏の突然の夕立に焼けたアスファルトから立ち上る香りなんてものがあります。夏を表現するときに使われたり心情を重ねて表現する事もあるでしょう。だいたい何処の誰も近くにアスファルトがある所にお住まいでしょうから毎年この香りは感じているはず。私もバイクに乗ってる頃には散々雨に降られ、焼けたアスファルト香を味わってきました。「うわ雨だ、濡れちまう」から、「カップねえわ、びしょぬれでええわー」とあきらめ「雨キモチイー、アスファルト臭たまんねー」までバイク乗りハイに至った事は忘れられない思い出です。まあ、雨で事故ったバイカーを見かけた事もあるので、彼らにとってアスファルト香は嫌な思い出かも知れませんが。

高知におれば潮の香りは言っておかねばならない香りでしょう。海岸線を走りながら車の窓を少しでも開ければ、そこはもう砂浜です。高知の長い海岸線はこれでもかと潮の香りをドライバーに嗅がせてきます。しょっちゅう嗅いでいれば気が付きませんが、長く嗅ぐ事が無ければ、なぜ

だか嗅ぎたくなってくるのが潮の香り。私は潮の香りがすると不思議と落ち着いたり、水平線を思い、それを見たくなくなります。気分は抑揚を潜め、深呼吸して砂浜でマツタリ横になってもいいかなと、そんな気分になってきます。あまり海に行くこともないですが時には行ってみたいくなりますね。高知空港に到着した県外の方にも口ビーから外に出た時、潮の香りを感じるという人もいます。潮の香りは土佐の香り、歓迎香として売り出していくのはどうでしょうかね。

海に行ったなら山も気になる場所です。杉だらけの山に花粉症の人が行くのは少々冒険ですが山は山で香りがあるのです。今の季節だと結構低温になりますがそれがとても良い。空気が澄み切り、香ってくるのは植物が腐食して土に還っていく香り。谷川からの水しぶきを通して漂ってくる水苔や岩肌の香り。風に乗るのは山里の焚き物の煙と木炭と灰の香り。土佐の山は色々な香りがあるものです。低温であればあるほど香りの強度は小さくなり、感じにくくなります。だからこそ少ない刺激は山の澄み切った空気とともに味わい深く、集中して嗅ぎわけないと気付かない。かすかな香りというものは混じりけのない空気がなければ味わうことができない贅沢なのかも知れません。今やどこでも何かしら香りが漂ってきますし、都市にいればなおさら澄んだ空気には出会うことはできません。もうそろそろ山の芳香を楽しむ趣味が確立されてもいい、トレッキングやキャンプがメインではない、香りを愉しむという香しき嗜み(かぐわしきたしなみ)があったらいい、そんな気がしてきませんか？してきますね？やっぱりどうでもいいですね。

だいが、うさん臭くなってきました。リアルな香りから少し離れた方が良さそうです。なんだか匂う、そう、なんだか匂うということはこれ以上深入りしない方が良いという事です。これまでの経験から勘としてしらせてくれる匂いは判断の一助になりますが、一步間違えれば大損大怪我大失敗を招きます。思い込みの疑いもかかっています。自信を持って導き出せる答えならば問題にはなりません、わからないことが多いが故に勘に頼ることもありましよう。元チェスの世界チャンピオン、ガルリ・カスパロフも次の一手を打つときに匂いでわかると言っていた。幾千幾万の経験を瞬時に頭で呼び出し最適解を導き出す。あまりに膨大な演算なため「匂う」という表現を使うのかも知れません。ほぼ無意識下から勘として届けてくれるから「匂う」のかも知れません。

思えば、なんだか疑わしい情報を臭いと言ったり、意外と「匂う」「臭い」と表現するのはよくありますね。「何だかキナ臭い」「犯罪の匂いがする」「ゲロ以下の匂いがプンプンする」「ごめん臭い、これまた臭い、あーくさい」「失礼放かせていただきます」まだまだ出そうです。どれもこれも怪しげで嘘くささを感じる時、つい言い放ってしまうセリフばかりですね。なぜ「匂う」「臭い」と表現するのでしょうか。「聞こえる」とか「感じる」でも構わないでしように。参考文献を当たれば出てくるのか、それは興味があれば調べてもらえればと思います。ここではワタクシの勘、そう、無根拠に書いていきましょう。そもそも匂いというのは空気に乗ってやってきます。台風シーズンであれば、いつもは届かない潮の香りが南風に乗って山を越えて匂う事があります。今でこそ気象観測は発達していて台風発生時に進路の予測までできますが大昔には前日にやっとわかる程度だった事でしょう。何度も台風の被害に会い続ければ、自然と「南風の潮の香りイコール危険」理解していったのではないのでしょうか。食べ物なんかでもそうでしょう、腐った食べ物を食べないようにまずは匂いを嗅いでみる。これも経験からですね。私も救急

車を呼ばなければならないほど食あたりをしたことがあります。それ以降は少しでも異臭や味が変わってしまった食べ物は捨てています。たまに酔っぱらって食っちゃいますが。他に、人でもそうなんです。仕事上、全く知らない業者と半商談になる事があります。彼らは独特で自信満々であったり、専門用語で煙に巻いたり、しゃべり続けたりと、何とか成約までもっていこうとします。もちろん商売だから当然なのですが不思議と彼らには匂いがあります。多いのはタバコ臭、コロンや香水の匂い、そして化粧の匂い、そしてそれらを消そうと消臭剤の匂い、いつも会う人と違う人なので初対面では匂いは結構気が付きます。そして中には怪しい商談や法律的にグレーな事を笑顔で言うてくる方々もおります。今の所、特に被害にあっている訳ではないですが、もし何度か損を引かされてしまっていたら、経験として香りも判断材料の一つになるのかも知れません。と、このように、いつもと違う匂いがするのは危険を知らせてくれている、この立場に立てば怪しさ疑わしさを「匂い」や「臭い」で表現するようになった歴史が大昔よりあったのではないかと思いたるのです。ええ、勘ですがね。

さて、嘘っぱちで書いてきましたが「香り」だけでも書けるものです。何処までもどうでもいいことを書くのをモットーにしてみたくなりました。まとめの時間ですが今回はまとめるつもりもございません。最後はぼやいて終わろうかと思えます。最初に書きましたが歳をとるだけ感覚は鈍くなります。若い方が鋭い。歳をとれば経験と知識が増えます。若い方が知識も経験も少ない。お互いがその事を理解して協力できれば弱点を補いあえるのではないか。

～お家にて～

私「グハッ、クサッ、だれやこの屁は！」

妻「……。」

私「子ちゃん、クサイよね？お鼻もげるよね？」

子(妻を見る。)
「別に何ともないよ。」

私「イヤイヤイヤ、窓開けて換気扇レベルやよ？」

私「音もなく忍び寄ってきたよ？有毒ガスだよ？」

子「大丈夫」

妻「パパはむこうの部屋に行ったら？」

私「え？え？被害者なのに？え？」

真実を話しても、協力の前には、為す術無しです。何とも無力、なんという社会の縮図。それでは皆さんの家庭での平穩のために一句授けましょう。

臭くとも 沈黙解けば 蓋される

著:澤村知秀